1998/02/13 山口新聞

暮らしの広場

レジャー

与那国島（沖縄）

「遺跡」、山城が水没？

なぞの海底ロマンを探る

「海中に眠る古代遺跡ではないか？」と、沖縄県与那国島の沖合で見つかった「海底ポイント」と呼ばれるダイビングスポットが、人気を呼んでいる。巨大な一枚岩の「面白い岩」が海中に横たわり、古代の山城が水没したものを連想させる。海底大学チームが調査し、「人為的に築かれた」との調査結果を発表したことから、ダイバーたちの関心を集めている。

与那国島は、台湾まで一〇キロ、石垣島まで一二〇キロの日本最西端の島。テレビにも、台湾・上海・ソウルなどの電波が入り、国境の島を実感させる。

ダイビングサービスを経営する[illegible]さんによると、島の周辺には、海底ポイントが二十カ所ほどあるという。海底ポイントについて、「最初は、ほとんどが海底の岩だと思っていた。ある日、海底ポイントの[illegible]を調べていたら、[illegible]さんが、『これは人工的に作られたものだ』と言った。[illegible]さんの話を聞いて、[illegible]」

海底ポイントは、[illegible]の水深[illegible]メートルの海中にあり、[illegible]メートルの[illegible]。[illegible]ポイントのスケッチを[illegible]。[illegible]年から[illegible]

[illegible]

[illegible]

1998/02/22 八重山毎日新聞

海底遺跡 昭和21年に発見

与那国出身の2人が証言

漁船員が発見日付彫り込む

拝所の新川香炉と関連性？

「海底遺跡ではないか」と注目を集めている与那国島新川鼻沖の石積み（町教委撮影）

田本義則さん

「海底遺跡ではないか」と注目されている与那国島新川鼻沖の石積みについて、祖納の元カツオ船乗組員が「海底遺跡は昭和二十一（一九四六）年五月十五日に発見された」と証言している。証言者の一人は、「海底遺跡が見つかる前、この付近の海には近寄ってはならないという言い伝えを聞いたことがある」と指摘し、漁業者たちが畏怖（恐れ）の念を抱いていたと述べている。陸上部の新川鼻には新川香炉（アラガグル）という拝所があることから、めったに人を寄せ付けない海と拝みの対象が接近していることに、興味を覚えている島民もおり、専門家による究明が待たれるところだ。

証言しているのは、横浜市の小嶺武夫さん（七〇）と石垣市新川の田本義則さん（七一）。二人はいずれも祖納出身で、一九四六年当時、与那国でカツオ船に乗っていた。

二人によると、海底遺跡を発見したのは、田本さんと同じカツオ船に乗っていた大嶺伝四郎さん（故人、一九二八年生）。大嶺さんは、遺跡の傍周に海底遺跡を見つけた日付を彫り込んだという。発見した五月十五日は、小嶺さんの誕生日にあたることから、小嶺さんが記憶していた。

カツオ船が休業になると、もりで魚を突きに海へ出る船員が多かった。中でも、大嶺さんは誰よりがうまく、「二十尋から二十五尋（四十メートル）は潜った」（田本さん、小嶺さん）。

新川鼻付近の海は「アーマミーバイ（ヤイトハタ）が生息しているから、近づくな」という言い伝えがあり、漁師はめったに近づかなかった。そういう海に、大嶺さんが誤って、海底遺跡を発見したというので、印象に残っている」（小嶺さん）。

小嶺さんは「昭和十（一九三五）年ごろ、明治十八（一八八五）年生まれの祖父（山口さん）が、この言い伝えを自分の孫に話していたのを覚えている。だれかが海に潜ったことがあるからこそ、こういう言い伝えができたのかもしれないので、昭和十年以前に海底遺跡を見た人がいたかもしれない」と推測し、言い伝えがどのようにして起こったのか調査している。

大嶺さんが海底遺跡を見つけた一九四六年の与那国島は、復員者にあふれ、食糧難に直面していた。久部良がさき貿易の基地となる前にもあった。田本さんも、小嶺さんも、目の前のあわただしい生活に、海底遺跡のことを思い出すことはほとんどなかったが、最近、テレビで放送されるのを目にしてから、記憶がよみがえってきたようだ。

二人の証言は、四表島千立出身の元新聞記者、平海崇夫さん（横浜市在住）が発行する茶菓新聞「こいなぁら」の第七十六号（一月二十日付）に最初に掲載された。平海さんは「小嶺さんの元には、当時の資料や写真などが集まっている。さらに詳しいことが分かるのではないか」と期待している。